



「展覧会を終えて：創造力について考える」

校長 小高敏男

梅の花が咲き始め、春の訪れを感じる中、校庭で遊ぶ子供たちの姿に一年間の成長を感じます。子供たちは、まとめの学習を通して、一年間を振り返り自己の成長を実感するとともに、次年度に向けた新たな目標を見付けています。

先日の展覧会には、たくさんの保護者の皆様や地域の方々にご来校いただき、ありがとうございました。子供たち一人一人の個性あふれ創造性豊かな素晴らしい作品が並び、体育館がすてきな空間となりました。個人作品だけでなく、学年や異学年での共同制作も会場を盛り上げ、子供たちの記憶にも残っていくことだろうと思いうれしくなりました。

飾られた子供たちの作品一つ一つを見ていて、作品から子供たちの創造力の素晴らしさを感じるとともに、その創造力を伸ばすことが、これからの社会で最も必要な力なのだと感じました。子供たちの将来の仕事において最も必要とされる能力が「創造力」であり、作品づくりが創造力を育む活動であると考えたからです。AIの急激な進歩や少子化・人口減少が進む日本の未来において、人の生活の豊かさを支えるのは、人の創造力だと考えます。

ある世界調査によれば「自分を創造的だ」と考える割合は、アメリカ人が47%、ドイツ人が44%、イギリス人が37%であるのに対して、日本人はわずか8%だったといえます。日本人の謙虚な国民性を差し引いても低い数字です。子供は、幼い頃から絵を描いたり物を作ったりすることが大好きです。誰に教わることもなく、見て感じたままを形や色に表すために鉛筆やクレヨンを手に入れます。その作品からは、大人には感じ取れない、その時期特有の感性と感覚の素晴らしさが見られ、出来映えに驚嘆することが多々あります。感じたことを思うままに形や色に残すことができるのは、子供に「常識にとられない発想や夢中になれる純真な心」があるからではないでしょうか。それでは、なぜ8%になってしまうのでしょうか？

その一つは、『思考の仕方と環境』です。人は、情報を整理し体系化して分かりやすくしようとするものです。それ自体は悪いことではないのですが、それがやがて「パターン化」して思考が固定化し、視野を狭くして創造力が低下してしまうのです。マニュアルだけではだめである、という考えにも似ています。そうならないためには、『多様性と寛容性がある環境』が大切なようです。人は、結論を決め付けたり異議を受け入れなかったりすることがあります。学校や家庭での思考環境が、多様性がなく決め付ける傾向であったり「どうせだめだ」「否定される」などと受け入れられなかったりする環境ではなく、多様な考えを受け入れてくれたり引き出してくれたりする環境であることが大事なのではないでしょうか。家庭での会話を見直してみるとよいと思います。

もう一つは、『結果ではなく行動に着目したあくなき探求』の取組です。何か創造的な活動に挑戦するときに、「できるかできないか」とイメージするのではなく、結果や完成は明確でなくても「できることを前提」にして「何をするか」の行動に着目して取り組み続けることが大切なようです。「成功の反対は失敗ではなく、多くの失敗の延長線上に成功がある。」ということです。「挑戦し続けているときに失敗はない、挑戦をやめたときに失敗となる」ということにも似ています。

子供たちの作品には、固定概念にとられない発想の作品が多く見られました。構図や素材、彩色など、多様な工夫がされた作品も多く見られました。また、細部にまでこだわりを感じる根気強い作品も多く見られました。作品づくりを通して、将来に役立つ資質が育まれたのではないかと考えています。これからも、家庭・地域・学校との連携と教育の本質を大事にして子供の未来につながる教育活動に取り組んでまいります。